

おくのほそみち					
～ ‘リハビリテーションが行なわれる場’ について考える前に～					
				理学療法士 奥野 景子	

「けーちゃんがお休みの日は、誰か他の人が行ってくれるんじゃないの？」と聞かれた。「いや、うちがお休みの日は、日を振り替えたりお休みにする人が多いかなあ～？まあ、振れる人は、他の人をお願いすることもあるけどなあ」と、私は答えた。そして、「でも、知らない人が突然‘代わりに来ました～’って来られても困るやろうし…」と付け加えると、叔母も少し納得したようだった。週末出張の都合で平日にお休みをいただいた私は、京都に住む叔母と実家から遊びに来た母親との三人でお昼ご飯を食べに行った。これは、そこでの一場面である。

「訪問リハビリという‘仕事’」を中心に置くと「‘代理の’誰か」になり、「訪問先の‘家’」を中心に置くと「‘その’誰か」になる。今思い返すと「たぶんそうゆうことやなあ～」と、私は思う。

～ 前回のおさらいと今回のこと ～

前回のマガジンでは、「リハビリテーションとは何か？」という問いを投げさせてもらいました。その語源や定義と自身が実際に行なっているリハビリテーションとの乖離について述べ、現段階での私なりの答えを述べました。そして、その答えは「生きることそのもの」です。詳しくは、前回のマガジンをご参照いただければと思います。

そして、今回は前回の予告通り「リハビリテーションが行なわれる場」について書いていこうと思っていました。ただ、色々と考え始めると、それについて書く前に考えておかなければならないこと、それについて書く前に自分の中にあるもやもやを書いておいた方が良いのではないかと思い、今回は予告したテーマの少し手前のことについて書いてみようと思います。

0. さて、どう書き進めようか…な。

00. ‘リハビリテーションが行なわれる場’
について考える前に

000. ‘家’という小石につまずく

0. さて、どう書き進めようか…な。。

私は、2015年3月に立命館大学大学院応用人間科学研究科対人援助学領域を修了した。その時に書いた修士論文の一部に今回書くテーマと類似したものがある。前回予告した「リハビリテーションが行なわれる場」について書くにあたっては、それを軸に話を膨らませようと思っていた。ただ、改めて読み返すと、うーん、、となった。修士論文では「回復期病院と訪問リハビリの違いについて」という項目で私自身の経験に基づいて各々の場所、そこで行なわれるリハビリテーションの違いなどについて書いた。修士論文の最後には、やはり「リハビリテーションとは、生きることそのものだ」と書いたのだが、リハビリテーションをそのように定めた場合、「場所」に軸を置くことは何か違うような気がしてきた(そもそも‘回復期病院-訪問リハビリ’という対比自体が違うとも思っている)。それに修士論文に自分が書いた内容についても悩ましく、疑わしい点もいくつかあった。当時は手を付けられなかった制度に仕事を通して触れたり、訪問リハビリを行なう友人の話の聞いたりすることを通して、それだけじゃない現実や社会のありようが見えてきた部分もいくつかあった。

そんなことを考えていると「さて、どう書き進めようか…な。。。」と、立ち止まって

しまった。これが項目「0」で良いのかも定かではない。もしかしたら「-3」や「-206」とかなのかもしれない。でも、それなら「0」までに何をしなければ良いのかもわからない。そして、「0」から「1」に辿り着くまでの無限の点で何をすれば良いのかもよくわからなかった。よくわからないので、各項目にはなんとなくで番号を振っておいた。

少し論点が外れてしまったが(あながち外れてないと思ってもいますが)、つまり「さて、どう書き進めようか…な。。。」ということである。うーん、、から少しも進んでいない。でも、とりあえず「今の、今までの私自身に基づいて」書き進めて行くことにした。そして、改めて自分にはそれしか出来ないとも思った。今回は、そんなことが出来るこのマガジンに出会えて良かったなと思いながら書き進めてみようと思う。

00. ‘リハビリテーションが行なわれる場’ について考える前に

「リハビリテーションが行なわれる場」について書こうと思っていた時、どんな風に書き進めても納得できる気はしなかった。だから、最初に思い浮かんだようにやってみようと思い、書き進めることに決めた。

生きることに軸を置いた場合、「場所」に焦点をあてるより「当事者の生活により近いのはどこか？」もしくは「誰にとってのホームグラウンドなのか？」が大切なような気がしていた。ただ、‘患者中心の医療’などという謳い文句もある。この場合、当事者がどこにいても‘そこは当事者のホー

ムグラウンドでなければならない’ もしくは ‘当事者の生にこそホームはある’ となるのかもしれない。でも、そうではない現実があるもの事実であり、入院中の多くの人が状況にもよると思うが「ここが自分の生きる(生きている)場所」と思っているとは考え難い。ひとまず、「リハビリテーションが行なわれる場」について書くにあたって、「誰にとってのホームグラウンドか？」ということに焦点をあてて書いてみることにしていた。

ホームとアウェイに明確に二分できる訳ではないと思うが、私のイメージでは表のようになる。サッカー日本代表が他国の代表チームと日本国内で行なう試合をホームゲーム、日本国外で行なう試合をアウェイゲームと言う。そんな感覚で、ホームとアウェイという言葉を使ってみた。本来であれば「ホームグラウンドとは？ホームとは？アウェイとは？」という定義を明確にしなければならないと思うが、実はこれを真剣にやろうと思うと、とても厄介なことになるような気がしていた。だから、「リハビリテーションが行なわれる場」について書こうと思っていた時は、そのところは完全に濁していこうと思っていた。が、書き進めているうちに濁しきることもできず、中途半端に淀んだまま書いている部分がいくつもあり、手が止まってしまった。「だったら、そのことについて書けば良いやんっ」と思い、今回は「‘リハビリテーションが行なわれる場’ について考える前に」というテーマで書いてみたいと思う。

	当事者	私
病院	アウェイ	ホーム
家	ホーム	アウェイ
施設	ホーム？ アウェイ？	ホーム？ アウェイ？

000. ‘家’ という小石につまずく

さて、私が何を濁し、何について淀んだまま書き進めていたかと言うと「‘家’ とは何か？」ということである。

ここで、家に関するいくつかの質問を考えてみる。「あなたの家はどこですか？」「あなたにとって家とは何ですか？」「あなたが住んでいるのはどこですか？」似ている部分もあるが、全く質の異なる質問でもあると思う。学生時代と就職してからを合わせるとかれこれ 10 年近く一人暮らしをしてきたことになる。そして、今も一人暮らし中である。「週末は実家に帰るの？」訪問先の方にこんなことを言われることがある。今の私にとって‘家に帰る’とは、一人暮らし先の自宅に帰ることを意味することが多い。生まれ育った家に帰ることは‘実家に帰る’と言う。実家は‘実の家’と書く。でも、今の私にとっての‘家’とは少し違う。知人の中に、一人暮らしを始めてから親が実家を引き払い、別の家に移り住んだり、別の地域に引っ越ししたりした人が何人かいる。その中の誰かが「実家がなくなった」と言っていた記憶が思い出される。実家とは、場所のことなのだろうか？たぶんそうだけど、そうじゃない。「あなたにとって家とは何ですか？」という質問に対してはそれなりの答えが出せそうだが「あなた

にとって実家とは何ですか？」という質問に対する答えは何となく難しい。その答えに場所の要素が含まれることは間違いないような気がするが、たぶんそれだけではない。においや風景があり、思い出がある場所であってそれがつくられた場所でもあるのだろう。それだけじゃないことやものが含まれる、含んでいる、あらかし、あらかわれてくる、意味して、意味されて、なんだかんだ…。まあ、つまり、なかなか答えに困るということである。

ここからは、いくつかの‘家’に関わるエピソードを通して、‘家’に関する疑問やそれが何なのか、私の中にあるもやもやがどのようなものなのかを表したいと思う。

●「じゃあ、やることもあるし 京都に帰ろうかな!？」●

つい先日、東京での研修を終えた私は、そのまま実家に帰ろうと思っていた。ただ、職場の出張扱いで行っていた研修だったため、新幹線のチケットは京都までしかなかった。なので、京都からは在来線に乗り換えて実家に帰ろうと思っていた。でも、実家に着く時間が夜中になりそうだとわかると、母親から「荷物もあるやろうし、無理して帰ってこんでいいよ(*^_^*)」とメールが来た。‘せっかく帰ろうと思ったのに…’と少し思ったが、やらなければいけないこともやりたいこともあったため、実家に帰るのはやめることにした。そして「じゃあ、やることもあるし京都に帰ろうかな!？」と、私は返信した。

今の私にとって‘家’とは一人暮らし先の自宅を意味することが多い。ただ「じゃあ、やることもあるし家に帰ろうかな!？」とは書かなかった。たぶんそうやって送ると母親は混乱するだろうな、とも思う。‘えっ、どっち!?’と。それに、本人は忘れているかもしれないが「あんたらの家はここ(実家)なんやからな」といつか言ってくれた母親のことを思うと「私の家は京都にある」と言いたくない部分もある。し、私の‘本当の家’は実家だと思っている私もいる。

このやり取りには、母親と子どもと言う関係性の影響もあると思うが、なんだかなあ～な感じになる。

●アジトと部屋●

東京での研修ついでに大学院の先輩が住むシェアハウスに遊びに行った。始めは、ただ会うだけの予定だったが、渡さないといけない物もあったり、このテーマについて話していたりしたこともあり、シェアハウスに遊びに行かせてもらった。知らない町の、知らない駅で、人ごみに流され、立ち止まる位置さえ見つけるのに苦労し、なぜか陽気な踊りを踊る人たちに愕然としながら、‘東京ってコワイ…’と田舎者丸出しで怯えながら、やたら距離の近い体温高めのおばちゃんに戸惑い、小さなスーツケースをゴロゴロ引いて、そこに向かった。

私の親しい人の中でシェアハウスに住む人は、その先輩くらいだ。まずは、みんなが集う台所兼ダイニングで一服させ

てもらい、それから部屋に移動してなんやかんや話した。先輩にとっての今の‘家’はこのシェアハウスだが、秘密基地のような‘アジト’のようにも思うと言われた。他の住人とも話していると、‘部屋’という境界もあると言う。‘確かにそうだな’と思った。実家の二階には部屋が三つあり、その一つ一つは姉二人と私の部屋になっていた。姉の部屋に入る時、姉が部屋にいればノックをして入った。姉が部屋にいない時は、なぜかこっそり、なんだか申し訳ない気持ちになりながら部屋に入った。

‘家’は、台所やダイニング、リビング、寝室、各々の部屋、トイレ、お風呂などによって構成されることが多い(ワンルームマンションとかは少し違う)。その一つ一つには、敷居や扉という目に見える境界があり、目に見えない境界もある。シェアハウスのことも考えると、そこに集うのは血縁者や配偶者だけでなく、もともとは他人だった人のこともある。そんなことを考えると「‘家族’って何なんだ？」という疑問も浮かんでくる。なんだかなあ～な感じになる。

●アシナガバチ詐欺●

「そこにハチがおったやろお？あれが怖くて、その扉も開けるのが怖くてな～。新聞取るのもゴミ捨てるのも大変やわあ…」と、おばあちゃんが言った。『確かにそうですね～。ちょっと怖いですね…』と、私は返した。確かに、私も家の中に入る時、ハチを気にしながら少し急

いで家の中に入った。ほんの少しの間が空いた後「あれ、どーにかしてくれへんかあ？」と、よくわからないことをおばあちゃんが言った。‘ん？’と思いながら『…えっ？』と返した。「あのハチは大人しいしなあ。刺してくることなんかないし、そこの殺虫剤でプシューってやってくれへんか？」『いやいやいやいや……無理ですよ、そなん、…、』「せやけど、怖くて出るのも大変なんええ…刺されたら大変やろ??」『あつ、えつ、そ、そうですけど…』と、少し心が揺らいた。‘でも’と思う。『大人しくても攻撃したら絶対怒りますって!』「んなことあらへん。怒る前にやっつけたら良いやん♪」茶目っ気のある笑顔で言われても、私は騙されない。『この前、大工さんに来てもらってハチの巣を退治してもらったって言ってましたやんつ。大工さんにまたお願いしたら良いじゃないですか？ね??』「んなハチごときで大工さんなんて呼んでられへんわあ。大丈夫、大人しいから」『え、でも……』「私もなあ、昔アシナガバチに刺されたことあってなあ…すごく痛かったんええ。やから、やっつけて欲しいねん」『ほら！それ、大人しくても刺してくるってことですやん！？刺されたら痛いってことですやん！？』「大丈夫だいじょぶ、大人しいから！！」と。こんなやり取りを数分間続けて私は悟った。‘たぶんやっつけるまで帰してもらえない…’と。結局、殺虫剤片手に大声をあげ、叫びながらアシナガバチを退治した。おばあちゃんが言うように、(とりあえず)大丈夫だった。おばあちゃんは、そんな私を見て大爆笑していた。そして、「すごいすご

い！ありがとうなあ」と言ってくれた。鼻息荒く私は『…ど、どういたしまして』と答えた。

これは、私が訪問リハビリに伺ったおばあちゃんの‘家’で起きた出来事だった。診療所に帰った後、やや興奮気味の私は勇敢にもハチを退治した伝説を先輩に話した。先輩は「うわっ、あつぶない、、アシナガバチってやばいやつじゃなかったっけ!？」と言った。前代未聞の‘アシナガバチ、大丈夫だいじょぶ詐欺’にあったのは、私くらいだと思う。

さて、みなさんお分かりだと思うが、ハチ退治は理学療法士の役割でも、その専門性が発揮できる分野でもなんでもない。その‘家’の主であるおばあちゃんは、理学療法士ではなく、‘この’奥野景子にハチ退治を依頼した。そして、その‘家’に招かれた私は、理学療法士としてではなく、‘私’としてハチを退治した。私は、そのおばあちゃんのことを‘患者さん’ではなく、‘〇〇さん’だと思っている。

このエピソードには、‘家’だけでなく様々なキーワードが隠れているように思う。‘専門’‘専門性’‘場所’‘関係性’‘役割’‘リハビリテーション’‘訪問リハビリ’‘訪問’などなど。そして‘アシナガバチ退治’は、何を象徴しているのか？他にどんなキーワードが隠れているのか…。なんだかなあ～な感じになる。

●宅急便の時間指定●

仕事を終えて‘家’に帰るとポストに

宅急便の不在票が入っていることがある。

‘そ一言え、お母さんがなんか送ってくれるって言ってたなあ’とか‘おっ、やっと本が届いた’と思ったりする。‘部屋’に入り(よく考えると、マンションでも‘家’と‘部屋’って使い分けていると思う)、自分の予定を頭のなかや手帳を見ながら確認し、‘この日のこの時間やったら大丈夫やな’と再配送の手配を電話で行なう。そして、再配送の当日。時間を気にしながら仕事を切り上げ、帰路に着く。再配送の始めの時間(だいたい配送時間には、△時～◇時とか幅が持たされている)に間に合えば良いが、少し遅れた時やギリギリにマンションの入り口に辿り着いた時は‘まだ来てないやんな?’ ‘エレベーターに乗ってる間に来ませんよーに’と思いながら‘部屋’に向かう。再配送の終わりの時間が近づいてもチャイムが鳴らない時は‘トイレに行ってる間に来ませんよーに’と少し急いでトイレに入る。自分の‘家’なのにそわそわしてしまう。

訪問させてもらう人の中には「そんなに早く来てもらったら、準備も間に合わへんし…」と少し遅めの時間を希望する人もいれば「待ってるのもくたびれるし、出来たら早めに来て欲しいです」と朝一の訪問を希望する人もいる。「お昼食べたらゆっくりしたいし、夕方が良いです」とか「ずっと家おるし、いつでも良いよ」とかもある。中には、予定していた時間と少しでもずれると怒る人もいる。たぶん、それは単に‘時間に厳しい人’という訳ではない。医師が来る訪問診療の場合、お昼ご飯の時間にかかりそうな時は

何も食わずに待っている人やトイレも我慢して待つ人もいると聞いたこともある。

どちらも‘家’に人が来るという点では同じである。「ただいま」と言い「おかえり」と言ってもらえる‘家’があり、「おじゃまします」「おじゃましました」と言い「どうぞ」「よく来たね」と言ってもらえる‘家’がある。そこが誰の‘家’なのかによって、そこでの振る舞いは変わってくる。同じ人たちでもどこで会うのかによって、互いの関係性は変わってくる。なんだかなあ～な感じになる。

～ 終わりに ～

‘家’に関するエピソードは、書き始めたらなかなか止まらない。思いのほか、長いマガジンになってしまった。もやもやの答えは出ていないが、私の中のもやもやの少しは書き出せたような気がしています。

次回は、今回書いたことを踏まえて「リハビリテーションが行なわれる場」について書いてみようと思います。もし、他のもやもやが邪魔した場合は、それについて書くかもしれません。その時は‘なかなか辿り着かないなあ～’と気長にお付き合いいただければ幸いです。

では、最後に。「あなたの‘家’はどこですか？」「あなたにとって‘家’とは何ですか？」